「きずきの森」は、さまざまな自然を楽しむところ！思いっきり遊ぶところ！森を守る活動ができるところ！

「きずきの森」ものがたり

コミュニティひばりの地区内にある“北雲雀きずきの森”。オープンしたのは 2010 年。今回はこの森にどのような思いがつまっているのか？　これからどのようなドラマが広がっていくのか？……　携わってくださっている専門家と整備の方々から伺いました。

次世代の子ども達に残す環境づくりを…

服部 保学長

（北摂里山大学学長・神戸大学大学院自然科学研究科修了、兵庫県立大学名誉教授、県立南但馬自然学校校長）

里山大学では阪神間のあちこちから既に11期生が卒業し、約350人の多数の方に学んでいただいています。そもそも森には手つかずの原生林、炭などの燃料のための里山、そしてきずきの森のような「まち山」があります。「まち山」とは10年ほど前に私が名づけたもの。住宅地に隣接する孤立林として残存しています。周辺住民から見ると身近で重要な自然であり、都市部の多様性保全を進めるにあたって核となる樹林です。住民が関わってつくっていく森ですが、それぞれが自由にするとまとまりのつかないものとなる。樹林について基礎的な知識が肝要。そして関わる人々が話し合って目標とする林をどうするか？全体計画を決めることが大事。樹木は100年も経つと大木となり、枯れて倒れてしまいます。危険がないように伐採をすることも必要。自然林も管理をしなくてはなりません。きちんとした植生調査をして全体像を把握して明るい、いろんな植物、昆虫を楽しめる森にしていってほしい。

子ども時代から森を知ってもらうために観察会も必要。自然学校では五感で感じてもらうことをしています。

例えば､刺し身皿についてくる蓼(タデ)を子どもに食べさせると“からーい”と悲鳴を上げます。これが“辛み”なのです。また、ヤブムラサキは触るとヴィロードのように柔らかい葉っぱです。今、子ども達は映像で簡単に自然や生物の神秘を知っています。しかし大事なのは自分の手で触れて、聞いて、見て感じること。きずきの森で３年生を対象にされている環境学習はとてもよいこと。森の管理とともに継続してほしいです。

◀カザミグモ

◀ナナフシ

安全第一、緑をメインに楽しみながら整備…

きずな会 副代表の
久保喜照さん（川西市在住・活動歴 13 年）
兼武政司さん（川西市在住・活動歴３年）

定年後の過ごしようにぴったりで、住宅地のすぐそばにある緑の環境にはまったお二人、週２回の活動日はほぼ皆勤。「心身ともに健康によい活動で家族も歓迎」と里山大学も終了し、作業手順をつくり午前中２時間たっぷり汗をかかれる。数少ない樹木があると実生苗を似た環境に植えたり、夏に白い花が咲くクサギは増やして“クサギ通り”にしたり、下に向かってたくさんの白い花をつけるエゴノキが咲く時期は”森のシャンデリア“と名付けて楽しむことも。

クサギ▼

▲エゴノキ

近くに住むメンバーが「来てくださる方々の安全が第一」と、ゴミ掃除はもちろん、風雨後に倒木で道がふさがれていたり、道が崩れているのを発見した時にはすぐに駆けつけて修復してくださっている。会は森を愛する個性的なメンバーが揃い、忘年会は盛り上がるそう。仲間がもっと増えることを期待されている。

きずな会とは：2010 年にオープンと同時にボランティアグループ「きずな会」が発足。当初は不法投棄物の回収と処理、ハリエンジュの駆除、育苗とハリエンジュ駆除地での植樹がが主な活動。それが一段落した後は参加者の志向に応じて整備・ハーブ・農園・グリーンウッドワーク・バードカービングに分かれて宝塚市民と川西市民が半数ずつの約７０人が参加しています。

“ティナちゃんの森”について

2019年、きずきの森に隣接する山にメガソーラーが設置されるというニュースを知り、コミュニティは業者の説明会を受けました。景観のためにも、防災面からも許してはならないこの暴挙。コミュニティひばりは管理する兵庫県庁担当課に出向くなど何とか止めようと活動してきました。結局は雲雀丘在住の篤志家様のお陰で森は無事宝塚市の管轄になり、きずきの森に続く緑は守られました。9 ヘクタールもあるこの森は今“ティナちゃんの森”として通り道をつくる最低限度の整備が行われ、長尾台方面への道がつながっています。

立て看板には次のようなメッセージが書かれています。

『自然に満ちた素晴らしいこの森を未来永劫そのままにしておきたいとの願いから、この森を取得しました。そして、私たちのこの願いは宝塚市とも共有する事ができ、宝塚市へこの森を寄付いたしました。

今後もこの森を豊かな自然のままに保存していただきたく、地域のみな様にもこの願いをご理解いただきますよう、お願い申し上げます。

２０２３年７月　ティナちゃんの森寄付者より』

生態をよく知ればもっと面白い！緑の“小宇宙”を存分に楽しんでほしい

大沼弘一さん（兵庫県自然保護協会・調査部長）

きずきの森の豊かな自然を持続するには人間の手で触りすぎないことです。元々ゴルフ場やレジャー施設だった名残で平坦なところや傾斜地が組み合わさり、地下には当時作られた水路が今でも残っています。湿地もあります。この森にはセトウチサンショウウオなどの希少種を含む多様な生物が開発を生き延びて、あるいは人為的に持ち込まれたり、自然に移り住んだりして生息しています。

森の構成はコナラ林、ハンノキ林、チガヤ草原など変化に富んでおり、それらの植物に依存する生物が集まっています。

今日もいろいろな生き物を葉っぱの上や土の中で見ることができますね。チョウやハチが花の蜜を吸い、花粉を運んで受粉を助けたり、ダンゴムシやミミズが落ち葉を分解したりしています。植物も動物も自分たち自身で豊かな森を作り出しているのです。

生き物たちの森作りを応援するには人間が関わりすぎないようにしなくてはなりません。しかし、放置しておけばよいというものでもありません。例えばネザサは繁殖力が強く地下茎が横に這ってどんどん広がります。ネザサを残す場所、刈り取る場所を見極めることが大切です。

きずきの森は面積28ヘクタールですが、それを平面的に捉えるのではなく、目に見えない地下（土中、伏流水）、地上、樹上、さらにその上空を含む空間として捉える必要があります。いわばひとつの宇宙空間です。その中で植物、昆虫、鳥などを含めたあらゆる生物がバランスをとりながら生きているのです。

参考にしたい自然保護活動として福井県の気比の松原１００年構想が挙げられます。先を見据えた徹底した活動は見事。森と関わるにはそれくらいの期間を想定してほしいですね。

兵庫県自然保護協会は郷土の自然を調査研究し理解を深めることにより、自然に親しみ自然保護の心を育てることを目的としている団体。時に、地域住民の生活に悪影響を及ぼし自然破壊につながる開発等については、現地調査をした上で、当事者に撤回を求め許認可権を持つ行政機関に意見書を提出するなどの取り組みを展開している。

◀マユミ

取材にご協力いただいた
松田和美さん
（兵庫県自然保護協会事務局長）